

# ビデオ文脈依存再認におよぼすアウトシャイン原理の影響

○久保田貴之<sup>1</sup>・中島早紀<sup>2</sup>・漁田俊子<sup>3</sup>・漁田武雄<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>静岡産業大学経営学部・<sup>2</sup>楽天ソシオビジネス株式会社・<sup>3</sup>静岡県立大学短期大学部)

key words : 文脈依存再認, ビデオ文脈, アウトシャイン原理

中島・漁田・漁田 (2015) , ビデオ文脈依存効果について再認法を用いて検証し, 手がかり負荷が増大すると再認弁別においてビデオ文脈依存効果が消失することを示した。中島ら (2015) は, この手がかり負荷の増大にともなう手がかり強度の低下をアウトシャイン原理の影響と推測したが, 実際に検証を行っていない。そこで, 本研究は, 中島らの推測の妥当性を検証するため, 項目手がかり強度を下げることで, 同じ手がかり負荷のもとでも, 再認弁別において再認文脈依存効果が生じるか否かを調べた。中島ら (2015) の推測が正しいならば, 項目手がかり強度を弱めることで文脈手がかりが機能するようになり, ビデオ文脈依存効果が生じると考えられる。そして, この結果は, ビデオ文脈依存再認がアウトシャイン原理の影響を受けることを意味する。

## 方法

実験方法は, 中島ら (2015) の手がかり負荷18条件をおおむね踏襲したが, 項目手がかり強度を弱めるため, 項目の提示時間を変更した。

**実験参加者** 心理学関連科目を受講する大学生21名が実験に参加した。

**材料** 記銘項目は, 小柳・石川・大久保・石井 (1960) から, 熟知価3.50以上のカタカナ3音節名詞72個を相互に無関連になるように選定し, ひらがな表記して用いた。記銘項目72個のうち, 36個を旧項目, 残りの36個を新項目とし, それぞれランダムに振り分けた。

ビデオ文脈は, Smith & Manzano (2010) の選定基準に基づき, 4秒間のビデオ・クリップ4個を作成して用いた。ビデオ・クリップ4個のうち, 2個を旧文脈, 残りの2個を新文脈とし, それぞれランダムに振り分けた。

**実験計画** 文脈の異同 (同文脈: same context, SC条件 vs. 異文脈: different context, DC条件) による1要因実験参加者内計画とした。

**手続き** 実験参加者は, 15分間の実験に個別に参加した。実験は, 学習セッション, 保持時間, テストセッションで構成した。教示として, (1) 意図学習であること, (2) 学習方略は自由であること, (3) 項目とともにビデオを提示するが, テストするのは項目のみであること, (4) テストは学習セッションで提示された項目があったかなかったかを判断する再認テストであることの4点を告げた。

学習セッションでは, 旧項目を1.3秒/項目 (提示時間1.3秒, 提示間隔0秒) の速さで1つずつ順に提示した。項目の提示中, 背景として同じビデオ・クリップを6回ずつブロック提示した。ビデオ・クリップは4秒であるため, 1回の再生につき3項目が提示された。旧項目およびビデオ・クリップは, 17インチ液晶ディスプレイ (1072×768ピクセルの解像度) 上に提示された。ビデオ・クリップは画面全体に表示し, 旧項目は赤色のMSPゴ

シックフォントを72ポイントサイズで画面中央にスーパーインポーズした。

保持時間は, 計算課題と教示を合わせて5分間とした。計算課題として, 内田・クレペリン検査と同様の課題を行わせた。

テストセッションでは, 新旧項目72項目と新旧文脈4個を組み合わせて再認テストを行った。項目と文脈の組み合わせは, (1) 旧項目と旧文脈, (2) 旧項目と新文脈, (3) 新項目と旧文脈, (4) 新項目と新文脈の4通りが同数になるよう操作した。項目を対応するビデオ・クリップとともに1つずつ順に提示した。実験参加者は, 項目の下に表示された「あった」, 「なかった」のボタンをマウスでクリックすることで, 提示された項目の新旧の判断を行った。再認テストの終了後, 内省報告書に記入をさせ, 実験は終了した。

## 結果と考察

Table 1に, 本研究および中島ら (2015) の各条件におけるHit率, FA率, CRSを示す。中島ら (2015) の結果を含め, 2×2の混合計画として分散分析を行った結果, CRSの交互作用が有意であった [ $F(1, 40) = 4.94, MSE = .014, p = .032$ ]。下位検定を行ったところ, 4秒/項目の学習時間 (中島ら, 2015) ではSC条件とDC条件に有意差が認められず [ $F < 1$ ], 1.3秒/項目とした本研究ではSC条件がDC条件よりも有意に大きかった [ $F(1, 40) = 5.13, MSE = .014, p = .029$ ]。

分析の結果に基づくと, 本研究は手がかり負荷を変更していないにも関わらず, 中島ら (2015) で生じなかった再認弁別における文脈依存効果が生じた。学習時間を短くすることによって, 項目手がかり強度が相対的に弱まり, 文脈が手がかりとして機能するようになったと考えられる。これはすなわち, 中島ら (2015) の示した手がかり負荷の増大にともなう手がかり強度の低下がアウトシャイン原理の影響であることを意味している。ビデオ文脈依存再認は, アウトシャイン原理の影響を受けるといえる。

Table 1. Mean hit rates, false alarm rates, CRS rates as a function of context.

Context	本研究		中島ら (2015)	
	SC	DC	SC	DC
<b>Hit</b>				
<i>M</i>	.725	.656	.741	.780
<i>SE</i>	.029	.030	.035	.024
<b>False Alarm</b>				
<i>M</i>	.198	.212	.132	.140
<i>SE</i>	.023	.032	.025	.028
<b>CRS</b>				
<i>M</i>	.526	.444	.609	.640
<i>SE</i>	.034	.034	.033	.031